

日曜論壇

まつもと 謙 松本

2014.3.9



超えて環境
が変化して
いる。まさ
に正対すべ

2月に発生した雪害が、本県をはじめ広く関東甲信地域の農業者に被害を与えている。被害に遭われた生産者の皆さまの深い心痛を察し、心よりお見舞いを申し上げますとともに、一早い復興のため万全の対策が講じられることを望んでやまない。

この一年、本県の農業は昨年春の凍霜害、夏の酷暑と少雨、秋の台風、そして今回の雪害という度重なる気象リスクに直面してきた。年を追うごとにさまざまなリスクが増している。私たちが「想定外」という表現でくくることで常識的に許容したくない、とい

き時と、警鐘を鳴らしているようである。

このような事象は農業に限らない。縮退経済下に直面する社会構造の変化そのものが、少なからず現役世代の私たちに与えるのは既に未知の経験といえる。だからこそ想定外の事象発生は、現時点でそ

ればならない。

一方で、こうした時代の変化は「革新」を生みやすいと考えることもできる。幕末から明治維新への時代変化を例に見るように、人類、文化、科学技術、いずれも劇的な成長の原動力は、総じて変化の渦中に生まれる「革新」の種

ピンチの中にチャンスあり

の序章に過ぎないといっても過言ではないのかもしれない。

それを踏まえて私たちは、昨日までの常識が今日の非常識になり得ることを真摯に受け止めて、その変化に柔軟に対応するスピード感と多様なリスクに対する耐性を、対応体制の整備とともに養わな

にあったと考えられる。

確かに企業経営に置き換えてみても、業績を伸ばす源泉はピンチの中にあるチャンスに隠れていることが多い。要するに、こうした激動の中で

農業に話題を戻せば、わが栃木県は全国屈指の農業県である。さまざまなリスクが顕在化し始めた今こそ、本県農業が全国のリーダーシップを発揮する舵取りを担うべく、「守り」と「攻め」の両軸で

築く強い農業戦略を確立し全国に示す、千載一遇のチャンスと考えられないだろうか。

具体的には産地保全のための戦略的な地域技術の健全な継承、生産性の高い農地政策のための新たな担い手育成の仕組みづくり、特定のフ

ードチェーンだけではなく地域企業による農業参入の促進、生産者が主体的に選肢を持つ包括的な生販一体の地域での出口戦略などである。

この実現には枠組みを超えた連携や価値連鎖が重要であり、革新的な地域農業基盤整備は地域経済全体のけん引役ともなり得る。まさにこれが「地域の6次産業化」という成長プラットフォームの考え方である。

(ファーマーズ・フォレスト代表)

ウの共有、地域連携という広い視野での柔軟な基盤整備の